

社会人

第58話

千葉県我孫子市にある 産声をあげた。

私塾「白樺教育館」。10 教室には今、小学生か人ほどで満席になる教室から70歳代の地域住民が通に土曜の午後、制服姿のう。小、中学生には授業少女らがやってきた。主の進度に合わせた教科のに高校、大学生を対象に 学習。高校生以上のクラした哲学教室。秋季の教スでは、「自由な対話に材は、ルソーの「社会契約論」の初稿「ジュネーブ草稿」(光文社文庫)だ。話者は「タケセン」の愛称で親しまれる塾長、武田康弘(ただけだ・やすひろ、57)。大学の哲学科を卒業、1976年にこの地で「いささか反時代的な塾」を立ち上げた。団塊の世代にジュニアが生まれ始め、大手進学塾が有名校への合格実績を競って規模拡大を始めたころ。木造賃貸アパートの一室で、公式などの暗記ではなく「意味の理解」を理想とした小さな塾が

「秩序とは何か」 サルトル、メルロ・ポンティなどを邦訳した哲学者の竹内芳郎らと交流、対話を重ね、武田がたどり着いたのは「生活世界からの哲学」。自分が体験したことを思い出し、どう感じたかを意識して自由に意見を述べ、その営みを励まし、根拠づけるものが哲学」

街の哲学 人を動かす

①の手で導く

②

と信じている。

教室で、タケセンがジュネーブ草稿の一節を朗読する。「社会秩序とは神聖なる権利であり、これが他のすべての権利の土台となるのである。しかし、この権利は自然に生まれるものではない。合意を基礎として生まれたものなのだ」。ルソーが後に刊行した社会契約論の核となる記述だ。「秩序は人々を縛るものではなく、なぜ権利なむ個々の契約を成立させ

の問い掛けから、「社会契約」「一般意思」など約といっても意味の次元が違ふんだね」とうなずいていく。高校2年の女子生徒が質問する。「日本の授業は、こうした問答は契約社会ではないか」と重ねて進む。午後8時すぎからは、ルソーの考えは私たちがの社会に当てはまらない。そんな話を聞いた武田が応答する。ルソーが記述した「合意」は人民主権を保障する理念、商行為を含む徐々に盛り上がる。この塾には多様な人々が集い、去っていく。小

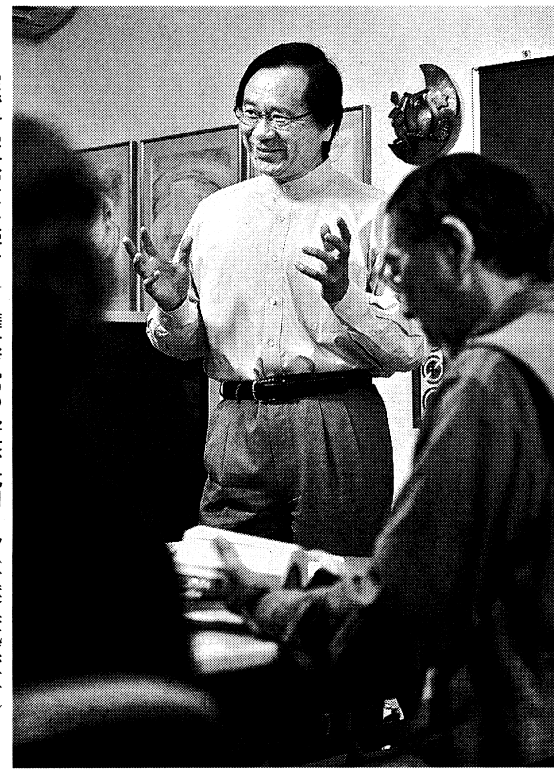
の問い掛けから、「社会契約」「一般意思」など約といっても意味の次元が違ふんだね」とうなずいていく。高校2年の女子生徒が質問する。「日本の授業は、こうした問答は契約社会ではないか」と重ねて進む。午後8時すぎからは、ルソーの考えは私たちがの社会に当てはまらない。そんな話を聞いた武田が応答する。ルソーが記述した「合意」は人民主権を保障する理念、商行為を含む徐々に盛り上がる。この塾には多様な人々が集い、去っていく。小

「丸刈り」を問う

かつて我孫子市の公立中学が男子生徒に事実上、強制していた「丸刈り」問題は、この塾に通う生徒が投げかけた切実な疑問を契機に議論が深まり、市民運動に発展。教育委員会との対話を終て全面廃止へと至った。同市の情報公開条例の制定機運もここでの座談が発信源。書斎での哲学研究ではなく、「街場の問答的哲学」が、地域の身近な問題を考え、変えていく原動力となった。

33年間、市井の哲学者として地域に根ざし、市民との対話に徹してきたタケセンが今年10月、請われて非常勤の国家公務員になった。参院行政監視委員会の委員調査員に任命され、月2回、国会に所属する官僚に哲学の講義を始めたのだ。行政監視委員会はキャリア官僚の不祥事などを契機に発足した参院独自の常任委員会。依頼された講義内容は、「日本国憲法の哲学的土台を明らかにする」。参院行政監視調査室の首席調査員、荒井達夫は、「公務員倫理やキャリアシステムの問題の本質を、武田哲学の視点で明らかにしてほしい」と期待する。

敬称略 (和歌山章彦)



自宅で哲学教室を主宰する白樺教育館の塾長、武田さん(千葉県我孫子市)

「感想や自らの体験談を「社会人取材班」まで、ファクス(03・62256・2771)、手紙、電子メール(shakakai@kyo-nikkei.co.jp)に送寄せました。」